



**Data** 2022-118  
監督: イン・ルオシン  
脚本: ヨウ・シャオイン  
出演: チャン・ツイフォン/ダレン・キム/シャオ・ヤン/ジュー・ユエンユエン/リヤン・ジンカン/ドアン・ポーウェン

### 👁️👁️ みどころ

中国には二つの顔がある。居丈高な軍事大国、経済大国の顔と笑顔がよく似合う素朴で質素な庶民の顔だ。そんな書き出しで、「私の大好きな中国映画作文コンクール」に『こんにちは、私のお母さん（你好，李煥英）』（21年）を題材として応募した私の作文は、見事3等賞をゲット！近時、大ヒットの『戦狼2/ウルフ・オブ・ウォー2』（17年）も『1950 鋼の第7中隊』（22年）も興味深いが、私にはやっぱり本作のような“ホンワカもの”の方がベターだ。

長く続いた中国の“一人っ子政策”は、さまざまな矛盾と問題を持っていた。それは本作を監督し、脚本した、共に1986年生まれの二人の女性の体験でもあったらしい。しかして、一人っ子政策の例外とは・・・？

本作の舞台は成都だが、北京で医者になる夢を持つヒロインにとって、突如現れた弟は邪魔。そんな存在のために自分の人生設計が台無しにされてたまるものか！ならば、さっさと養子先へ放出を！

そんな展開の脚本ながら、ラストには名作『卒業』（67年）で観た花嫁強奪のラストシーンを彷彿させる名場面に。これは必見！これは感動！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■戦争映画大作が大ヒット！低予算映画も社会現象に！■

『戦狼2/ウルフ・オブ・ウォー2』（17年）が大ヒットし、約963億円の興行収入を挙げた。続いて、『1950 鋼の第7中隊』（22年）も大ヒットし、約1130億円の興行収入を挙げ、中国映画の歴代最高を更新した。他方、2022年10月に開催された中国共産党第20回大会を終えた中国では、今や“台湾有事”に向けた緊張感が高まっている。

近時の中国映画の大ヒットはそんな戦争映画大作が中心だが、中国映画は他方で、チャン・イーモウ監督の「幸せ3部作」として有名な『あの子を探して（一個都不能少／Not One Less）』（99年）、『初恋のきた道（我的父亲母亲／The Road Home）』（00年）、『至福のとき（幸福時光／Happy Times）』（02年）（『シネマ5』188頁、194頁、199頁）や、フォ・ジェンチイ監督の『山の郵便配達』（99年）（『シネマ5』216頁）のような、日本人の大好きな、素朴で純朴な“ホンワカ映画”も多い。また、ウーラン・ターナ監督の『幸せの絆（暖春／Warm Spring）』（03年）（『シネマ17』180頁）のような“大催涙弾”映画もある。

近時のそんなホンワカ映画の筆頭は、ジア・リン監督の『こんには、私のお母さん（你好，李焕英／Hi Mom）』（21年）（『シネマ5』192頁）だ。同作を観て感動した私は、中華人民共和国駐大阪総領事館が主催した「私の大好きな中国映画作文コンクール」に応募し、見事3等賞をゲットした。本作はそれに続く“ホンワカ路線もの”だが、低予算で制作された本作は「マスクが濡れるほど泣いた。」などSNSで感動と共感のロコミが爆発し、『007／ノー・タイム・トゥー・ダイ』（21年）（『シネマ50』46頁）を超える異例のメガヒットになったらしい。そんな本作の先行試写が実施されたから、こりゃ必見！

## ■□■ “一人っ子政策”の矛盾。問題点を、姐姐の視点から■□■

中国では父、母、兄、弟、姉、妹のことを、それぞれ、父親、母親、哥哥、弟弟、姐姐、妹妹というが、本作の原題は『我的姐姐』。つまり、「私のお姉さん」だ。ちなみに、日本人が最も好きな中国映画であるチャン・イーモウ監督の『初恋のきた道』の原題は『我的父亲母亲』だから、いくら中国人に「初恋のきた道は良かった。」と話しても意味が通じない。したがって、本作についても、『シスター 夏のわかれ道』とされた邦題でいくら話題提供しても、中国人には全く通じない。また、英語の「Sister」では、「お姉さん」だけの意味は伝わらないし、「夏のわかれ道」という副題はかなりピント外れだから、この邦題はイマイチだ。

それはともかく、1986年生まれの女性監督イン・ルオシンが長編映画2作目の本作で取り上げたテーマは、中国の一人っ子政策（の矛盾と問題点）。また、その脚本を書いたのは、イン・ルオシン監督の同期生として中央戯劇学院演劇文学演出科を卒業した女性ヨウ・シャオインだ。一人っ子政策は1979年に始まり2015年まで実施されたもので、原則として一組の夫婦につき、子供は一人だけと制限した政策だ。共に1986年生まれのイン・ルオシン監督と脚本家ヨウ・シャオインは、その一人っ子政策によってどんな影響を受け、どんな矛盾、問題点を感じたの？本作の問題意識はまさにそれ。そして、本作はそれを姐姐の視点から描いたものだから、それに注目！

ちなみに、本作の登場人物は、脚本を書いたヨウ・シャオインが生活の中で観察した大勢の実在人物をベースにさまざまな特徴を総合して生み出したキャラクターらしいが、そ

のキャラクターの捉え方は素晴らしい。それは少しずつ本作の評論の中で紹介したい。

## ■□■事故で両親が死亡。6歳の弟が登場！姉の生活設計は？■□■

本作の舞台は、四川省の省都、成都。看護師として病院で働くアン・ラン（チャン・ツィフォン）は、医者になるために寸暇を惜しんで受験勉強に励んでいた。ところが、突然両親が交通事故で死亡し、両親の葬式には見知らぬ6歳の弟ズーハン（ダレン・キム）が登場してきたからビックリ！これは一体ナニ？これは、一人っ子政策の下で生まれたアン・ランが大学生になった時に、アン家の跡継ぎを強く望んだ両親が、二人目の子供ズーハンをもうけていたためだ。本作導入部では、そんなストーリー（内幕）が興味深い映像の中で描かれていく。私は1980年代生まれの中国人の友人がたくさんいるので、彼女らにはいつも「あなたは一人っ子？」と聞いている。イン・ルオシン監督は1986年生まれだが、全く同じ年に生まれた私の友人の女性に質問してみると、その答えは・・・？

それはともかく、そんな導入部のストーリーで、私が少し納得できないのは、アン・ランは自分が大学生の時に弟が生まれたことを知っていたの？それとも知らなかったの？その前提が少し曖昧なことだ。それはイン・ルオシン監督と、同級生である脚本家ヨウ・シャオインの責任だが、アン・ランは弟の存在自体を知らなかったの？それともそれは知っていたが顔を合わせる機会がなかっただけ？私にはその点を明確にしてほしかったが・・・。

アン・ランにとって突然の両親の死亡は大打撃。しかし、子供の頃から独立心が強く、今も北京の医大に入学するための努力を続けているアン・ランは、もともと成都を離れ両親と離れることに何の痛痒も感じていなかった。もちろん、北京の大学での学費や生活費は自分で稼ぎ、親に頼るつもりは毛頭なかったから、なおさらだ。しかし、成都で、幼稚園に通っている6歳の弟の面倒を、自分が姉としてみななければならないことになると、そんな自分の人生設計はハチャメチャに・・・。

## ■□■弟の面倒は誰が？伯母の意見は？養子縁組案も！■□■

本作にはアン・ランの両親の姿は登場せず、ストーリー展開の軸になるのは①父親の姉であるアン・ロンロン（ジュエ・ユエンユエン）、つまりアン・ランの伯母と、②母親の弟であるウー・ドンフォン（シャオ・ヤン）、つまりアン・ランの叔父の二人だ。四川省の一部地域では、お葬式の際に麻雀をする習慣があることを本作ではじめて知ったが、それは麻雀のパイを混ぜるシーパイで派手な音を立てることが死者にとって縁起の良いこと、魔よけになるなどの理由らしい。本作の葬式シーンで俄然存在感を発揮するのが、麻雀大好き人間のウー・ドンフォンだ。ウー・ドンフォンは同時に両親が死亡した交通事故についての加害者への損害賠償請求や、両親が住んでいたアパートの処分等についてもアン・ランにアドバイス(?)するので、それにも注目！しかして、そもそも、この男（叔父）は善人？それとも悪人？

他方、本作で最も興味深いキャラはアン・ロンロン。中国は日本とは異なり夫婦別姓だが、家意識や女性差別は日本以上に強い。アン・ロンロンはアン家の継承者が自分の弟、

つまりアン・ランの父親だったため、進学をあきらめた過去を持っていたが、それは姉である自分の運命だと受け入れてきたらしい。そんなアン・ロンロンが今の事態をみて、「姉なら弟のために我慢すべき」とアン・ランに意見したのは当然だ。それに対して、弟のために自分の人生設計をかき乱されたくないアン・ランの提案は、養子縁組案。ネット社会が日本以上に進んでいる中国では、ネット上で養子先を探すことが広く行われているらしい。善は急げ！アン・ランは直ちに父親名義のアパートの売却と養子先探しに着手することに。なるほど、なるほど・・・

## ■□■当面は弟と同居。早く養子先を！姉弟の同居生活は？■□■

叔母アン・ロンロンはそんなアン・ランを冷ややかな目で見つめていたが、アン・ランは大真面目だ。しかし、養子先が見つかるまでは、弟ズーハンを引き取り、幼稚園への送迎や食事の世話をするのは仕方がない。他方、ズーハンはずいぶん親がいなくなったのかすら理解せず、アン・ランとの同居生活でもワガママ放題だから始末が悪い。アン・ランがちゃっかり恋人を持っていたにはびっくりしたが、弟との同居生活から生まれる各種トラブルをその恋人（リャン・ジンカン）に相談しても、恋人からのアドバイスはピント外れで、アン・ランをイライラさせるだけ。その上、看護師という重要な仕事についているアン・ランが、そんなイライラを職場に落ち込むと、そこでもさまざまなトラブルが。ズーハンとの同居生活を始めたアン・ランの不満やストレスは今や限界状態。このままでは、姉による弟への虐待事件や、最悪の場合は殺人事件まで・・・。

さすがにそこまではいかなかったが、そんな状況下、裕福そうで物腰柔らかな夫婦が養子縁組候補として現れ、ズーハンとの面談でも気に入ってくれたから万々歳。ところがそれを聞いたアン・ロンロンやウー・ドンフォンは、ズーハンを養子として放り出すことに大反対。「姉が幼い弟を育て上げるべき」とアン・ランを責め立て、養子縁組を破談にさせようと結託したから、さあ、その後の展開は？

## ■□■一人っ子政策の例外は？罰金の他にもこんな方法が■□■

一人っ子政策は「原則として・・・」だから、例外もあり、漢民族でない少数民族は二人目も OK だ。また、多額の罰金を払えば、漢民族でも二人目が認められることが多い。そんな一人っ子政策は、他方で、中国が男中心社会であることを浮き彫りにした。それは、一人目が男の子であれば二人目は諦めるものの、一人目が女の子であれば多額の罰金を払ってでも二人目を産み「今度は必ず男の子を！」という声強いこと。それは、一人目が女の子だったアン家も同じだった。しかし、貧乏なアン家は多額の罰金を払うことはできなかったらしい。ところが、一人目の子供が身障者の場合も、一人っ子政策の例外として二人目の出産を認められることに気づいた父親は・・・？

本作導入部では、審査に来た係官に対して、左足が不自由でまともに歩けないことを示すためアン・ランの左足を激しく打ち付ける父親の姿が登場する。これは一体ナニ？そこまでして二人目の男の子が欲しいの？そんな父親の想いを目の当たりにしたアン・ランの

気持ちは如何に？

## ■□■子役の演技力に注目！喜んで養子に！？■□■

大人と違って子役の演技は自然そのもので天真爛漫。そうかどうかは別として、子役の名演技には涙を誘う映画が多い。その代表は、ギター曲があまりに有名なフランス映画の傑作『禁じられた遊び』（52年）。『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマ1』50頁）も、そうだ。

本作導入部に見るズーハンは、一人っ子政策が続く中国で有名になった言葉、“小皇帝”そのものだから、あまり共感できるキャラではない。しかし、両親がいなくなったことを思い知らされる中で次第に姉への愛情が芽生えていく姿は興味深い。そのため、当初はワガママ者同士の幼い姉弟喧嘩と思われていたいろいろなシーンが、少しずつ変容していくので、本作ではそれに注目！それに説得力があるのは、子役ダレン・キムの名演技とチャン・ツイフォンのもっすぐで共感できる演技によるものだが、それ以上にその点は間違いなく繊細な女性脚本家ヨウ・シャオイインと女性監督イン・ルオシンの手腕だ。

養子先が見つかるまでは仕方なし。そう割り切って親の残したアパートで同居していたこの姉弟の仲は最悪。ズーハンもストレスがたまっていたのだろう。幼稚園では考えられないようなイジメ(?)の実行も。これでは、幼稚園に呼び出されたアン・ランのメンツも大潰れだ。しかし、ある夜ケガをした弟を迎えに行った帰り道、アン・ランの背中にいる疲れ切ったズーハンの口から「ママと同じ匂いがする。」との声がある。そんな声を聴き、さらに背負った重さと体温が少しずつアン・ランに伝わってくると・・・？

ある日そんな弟は、アン・ランに対して明るく養子に行くことを承諾したが、それはズーハンの本心？それとも姉への付度・・・？

## ■□■ついに北京行きの日が！最終書類へのサインは？■□■

映画『卒業』（67年）は、私が大学に入学した1967年を代表するハリウッド映画。それまでのハリウッドの“映画スター”といえば、ジョン・ウェインを代表とする格好良い、男らしい男とされていた。しかし、同作の主人公ベンジャミン役を演じたダスティン・ホフマンは小柄だし、ハンサムでもなかった。そんな男が主演した『卒業』は、同年に話題を集めた『俺たちに明日はない』（67年）と共にハリウッド映画の“時代の転換点”になる映画だった。

『卒業』では、サイモンとガーファンクルが歌った『サウンド・オブ・サイレンス』と『ミセス・ロビンソン』が有名だが、自分の恋人ベンジャミンを母親ミセス・ロビンソンの情事の対象にされたことに、キャサリン・ロス演じる娘エレナが怒ったのは当然。そのため、同作ラストはエレナが別の男との結婚式を挙げる教会のシーンになったが、そこで起きた、あっと驚く事件とは！？それは私たち団塊世代の男女なら誰でもよく知っている“花嫁強奪作戦”だが、本作ラストはそれによく似た(?)“姉による弟の強奪作戦”になるので、それに注目！

北京に行くまでは自宅で弟と同居。その間に自宅を売却し、弟を養子先へ、それがアン・ランの立てた計画だが、何事も計画どおりに実行していくアン・ランのことだから、なんやかんやのトラブルに出会っても実行力は手堅いはず。“新しい資本主義”などと訳のわからない構想をぶち上げながら、なんの実効的な政策を伴わない岸田文雄政権とは大違いだ。しかして、今日は北京へ飛び飛行機のチケットも準備できたらしい。そこで「最後のご挨拶」としてアン・ランが養子縁組先を訪れると、そこで差し出されたのは「今後一切、弟と会わないこと」を誓約する書類だ。養親から「念のため・・・」と言われながら、そこへのサインを求められたアン・ランはすぐに了解し、スラスラと自分の名前を・・・。そう思ったが、そこでスクリーン上はなぜかさまざまな回想シーンに。すると、ひょっとして・・・？

その後の展開はあなた自身の目でしっかりと！それにしても『卒業』から50年以上経った今、『シスター 夏のわかれ道』と題された本作で、あのラストシーンの再現(?)を観ることになるうとは・・・。私は、こんな映画大好き！

2022(令和4)年10月25日記

『日本と中国』第2271号 「中国映画を語る69」 (2022年12月1日)

文化大革命終了後の79年から始まった一人っ子政策は良くも悪くも大胆な制度。両親から子供一人だけなら倍々ゲームで人口は減少し、将来的に人口はゼロに？15年に廃止されたが、その功罪は今や中国ではZ世代が主流だが、躺平主義も横行。しかし鄧小平が主導した改革开放政策下で急速に豊かになった80后は元氣だ。一人っ子政策の下で生を受けた86年生まれの二人の才女が体験した、跡継ぎの男の子を願う両親との確執は？

北京の医大に入り女医に！それが成都で看護師として働くアンの夢なのに、突然両親が交通事故で死亡し6歳の弟が跡継ぎとして登場！これは一体ナニ？一人っ子政策の例外は罰金だが、姉が身障者の場合も例外に？するとの時、父親が私の足を強打したのは？幼稚園の送迎、食事の世話はその義務。叔父も伯母もそう決めつけたが、養子縁組案は？

“一人っ子政策”の問題点を、弟の突然の登場に戸惑う姉の視点から！  
—監督も脚本も中央戯劇学院卒の80后の女性が—

姉は徹底した自立主義。対する小皇帝は超わがまま。そんな姉弟の束の間の同居生活はケンカばかりで最悪だ。ネット募集による養親候補は裕福で優しいから申し分なし。早く家を処分し弟も放出！そんな思惑の中、ある局面で「ママと同じ匂いがする」と言われると？ギター曲が有名な『禁じられた遊び』(52年)では子役の名演技に涙したが、6歳の弟の養子縁組承諾の意思表示は真意？それとも姉への忖度？それらの心理描写はさすがだ。北京への旅立ちの今日、弟とは二度と会わないとする誓約書へのサインを求められたアンは？

『卒業』(67年)のラストはチョー有名。母親の誘惑に負けた主人公による、教会での花嫁強奪作戦に拍手喝采！するとサインの前に回想シーンが次々と登場する本作はひょっとして姉による弟の強奪作戦に？そんな感動と姉弟讃歌はあなた自身の目でしっかりと！